

東洋大学長 殿

To the President of Toyo University

東洋大学海外からの研究員 研究報告書

Research Report for the Toyo University Research Fellow Program

氏名 Name	齋藤正志
所属機関名 Affiliation	(台湾) 中国文化大学
部局名 Section	国際・外国語文学部 日本語文学科
職名 Position	教授
研究テーマ Research topic	(日本語 Japanese) 日本文学における観光と環境—中古物語と現代小説—
	(English) Tourism and the Environment in Japanese Literature: Medieval Tales and Contemporary Novels
研究期間 Research period	2025 年 09 月 01 日～2026 年 02 月 01 日 From Y/M/D to Y/M/D
受入担当教員氏名 (東洋大学の所属) Name of Host professor (affiliation at Toyo Univ.)	泰田伊知朗先生 (東洋大学国際観光学部教授)
研究成果発表 (予定も含む) Publication/Presentation of research results (including future ones)	2025 年 10 月 27 日 (月) 講演「日本文学の話型と環境—川上弘美「神様 2011」をめぐって—」(東洋大学) 2026 年 3 月 20 日 (金) (予定) 口頭発表「川上弘美文学における観光と環境—「蛇を踏む」「神様」「神様 2011」をめぐって—」(中国文化大学) 2026 年 4 月 25 日 (土) (予定) 口頭発表「〈観光〉の視点に立脚した平安時代初期物語論」(淡江大学) 2026 年 6 月 28 日 (日) (予定) 口頭発表「村上春樹『騎士団長殺し』における回帰と反芻—環境批評と観光文学の観点から—」(淡江大学)
研究成果の概要 Summary of research results	2019 年に上梓した『川上弘美初期短篇研究—引用論による解説』寂天文化事業股份有限公司 (ISBN: 978-986-318-824-7) を基礎として、日本現代小説の中から川上弘美の短篇小説(「神様」及び「神様 2011」)を対象に、観光文学としての考察の上で講演した。今後は「蛇を踏む」と「神様」及び「神様 2011」を対象に観光文学と環境批評という両面からの考察を行う予定があり、また日本中古(すなわち平安時代)物語を対象に、観光文学としての考察を行う予定、及び村上春樹文学を対象として観光文学と環境批評の両者の観点から考察する予定もある。
研究成果(英語 600 単語以上、または日本語 1,700 字以上) Research results (more than 600 words in English or more than	日本現代小説の中から、川上弘美と村上春樹を選択し、日本中古物語の中から『竹取物語』と『伊勢物語』と『うつほ物語』と『源氏物語』を取り上げ、それぞれの作品世界を単独で、あるいは対比的に扱った。その際の観点が環境文学批評と観光文学批評とである。ただし、実質 5 カ月という時間的制約もあり、川上弘美では処女作「神様」と出世作「蛇を踏む」と問題作「神様 2011」という短篇 3 作品を対象とした。村上春樹では 13

1,700 words in Japanese)

番目の長篇『騎士団長殺し』を選び、その分析を進めてきた。また、『竹取物語』と『伊勢物語』を対比的に扱い、さらに『うつほ物語』と『源氏物語』も対比的に扱い、それぞれの特徴を環境と観光の観点から考察中であり、以上の平安時代物語と現代小説とを共通の観点から対比的に分析していくつもりである。

そこで講演として発表済みの川上弘美「神様」及び「神様 2011」について、『竹取物語』との関係から「成果」として報告しておく。言語による文章のうち享受者が芸術性を本質と看做し得る群体を仮に「文学テキスト」と定義すると、それを考察するための研究概念の一つとして話型を挙げることができる。言うまでもなく話型とは単一素材 (Motif) または一定の秩序で編成された複数素材から形成された話の型 (Type) である。

この話型を先行研究に従い、仮に異界・境界・現実の領域の主人公が現実→異界→現実と移動する「浦島型」と、異界→現実→異界と移動する「羽衣型」とする (高橋亨 1995: 62-63 「話型」『國文學』第 40 卷第 9 号臨時号) なら後者の羽衣型は山田仁史 2016: 273 「羽衣伝承にみるミンゾク学と文学の接点」に拠れば、「鳥類を初めとする異界の存在が人間界を訪れ、羽衣を奪われて人間に婚し、やがて自らの故郷へと帰る (swan maiden, Schwan (en) jungfraw) 一連の物語 (Backer2005/高木 2015: 35-71) である (野田研一・奥野克巳 2016: 271-292 『鳥と人間をめぐる思考 環境文学と人類学の対話』勉誠出版の「第 3 部 鳥をめぐる人類学」所収)。この話型はヨーロッパだけではなく東アジアにも広く分布していた (増尾伸一郎 2011 「交錯する〈羽衣〉伝承—二十世紀初期の東アジアにおける比較研究をめぐる—」堀池信夫編 2011: 345-377 『知のユーラシア』明治書院) ことが確認されている。

だが、浦島型も羽衣型も素材的には異類婚姻話型に包含され、更に異類邂逅話型として統合できる。周知のとおり『竹取物語』は異類邂逅話型であり、その話型を継承している川上弘美「神様」および「神様 2011」を環境文学批評の観点で考察することができる。環境文学批評とは「一つの方法や方針には限定されずに、環境への配慮の精神にもとづいて文学やその他の創造的な表現方法にみられる環境表象を考察する (ビュエル、ハイザ、ソーンバー 2014: 195)」方法である (奥野克巳 2016: 6 「序論—環境文学と人類学の対話に向けて」前掲の野田・奥野 2016 所収)。

そこで『竹取物語』だが、この古典物語もまた確かに、「異界の存在が人間界を訪れ、やがて自らの故郷へと帰る」話型になっているのだが、この作品では「羽衣を奪われて人間に婚し」という要素が存在しない。『竹取物語』の女性主人公は「羽衣を奪われ」ることなく、しかも「人間に婚」することもなく、異界から来訪して異界へと帰郷する。この点でヨーロッパや東アジアに広く分布した「羽衣型」文学を超克する新しい羽衣型を生成するに至った。この新しい話型は、過剰な男性の暴力で支配されてきた女性の劣悪な環境を一変させた。上流貴族男性との交際・婚姻を峻拒する「なよ竹のかぐや姫」の物語世界は世界文学史上で画期的な文学作品として認定されるべきだと考えられる。一方、川上弘美「神様」と「神様 2011」もまた決してファンタジーではない小説で、異界から来訪して異界へと帰郷する者が登場するが、それは人語を操る成熟したオスの熊である。この春から夏に掛けての間に転居してきた「くま」に誘われた女性主人公が徒歩 20 分程度の川原までハイキングのような散歩に行き、穏やかな時間を過ごして帰ってくるという話だが、この短篇は楽しい時間を共有できた隣人との穏やかな日常性を叙述しており、ヒトとクマの間には恋愛的要素が皆無である。その意味で「神様」は異類邂逅話型の羽衣型に類似し、反暴力的観点からも環境文学批評において価値を認めることができる。

また、「神様 2011」では同じ地域でありながら、「あのこと」の後は、いっさいの立ち入りができなくて、震災による地割れがいつまでも残っていたのだが、「少し前に完全に舗装」され、「車」も走ってい

た。しかも、この川原まで行くための水田沿いの舗装道路は「「あのこと」のゼロ地点にずいぶん近い」のだという。「あのこと」の内実は不明だが、「ゼロ時点」という表現はグラウンド・ゼロ、すなわち核の爆心地を意味する可能性がある。「神様」のように歩行者の安全のためではなく、「神様 2011」では「防護服を着てない」ことが理由で「車」が避けていく。長手袋の男が「くまは、ストロンチウムにも、それからプルトニウムにも強いんだってな」と言い、「くまの毛を引っ張ったり、お腹のあたりをなでまわしたりし」て去っていく。くまは「人間より少しは被曝許容量は多い」が「ストロンチウムやプルトニウムに強いわけ」ではなく、くまの言動に被差別の視点を想定できるが、他者の言動は明らかに偏見に満ちている。これらの叙述に環境批評的な批判が認められることは明らかである。だが、そうした危険な日常を過ごしていながらも作中人物／動物は敢えて外出を止めない。つまり、ここに観光文学批評の観点を発見することが出来るのだ。